

特集 病害虫対策技術の最前線

移植直後の水田における黄色粘着板を用いたヒメトビウンカの発生調査

黄色粘着板を用いてイネ縞葉枯ウイルス（以下、RSV）を媒介するヒメトビウンカの発生把握を試みたところ、本虫の発生量が把握できた。粘着板を用いることで、従来の「すくい取り法」や「払い落とし法」では難しい、水稻移植直後の水田での発生調査が可能になる。

内 容

ヒメトビウンカは RSV を媒介する水稻の重要害虫である。イネ縞葉枯病の発生は虫数と保毒虫率に影響され、虫数が多くても、保毒虫率が高くても、発病リスクは高まる。保毒虫率は事前の検定[※]によって知ることができる。しかし、本県において発病が多い普通期水稻（「ヒノヒカリ」等）では、移植直後からヒメトビウンカが飛来するものの、その頃的水稻は株が小さく、調査法として一般的な、イネ株を捕虫網ですくう「すくい取り法」（写真1）や、株元をたたいて虫を落とす「払い落とし法」の実施は困難であり、虫数の実態はわかっていない。そこで、移植直後でも設置可能な黄色粘着板を用いた調査法でヒメトビウンカの発生把握を試みた。

水田内の畦^{あぜ}際に、5m 間隔で3枚、10cm の高さになるように黄色粘着板（25.7×10cm）を設置した（図）。調査は水稻移植日である6月1日から7月10日まで約5日間隔で行い、粘着板は調査日毎に交換した。粘着板調査と同じ水田にて、慣行調査として、すくい取り法（10回振り×3か所）による調査を、移植27日後の6月28日から7月10日まで約5日間隔で実施した。

黄色粘着板では、6月7日以降の調査期間を通じてヒメトビウンカが捕捉（写真2）され、6月6半旬にピークとなったが、すくい取り法では6月28日には成虫が、7月5日、10日には幼虫が確認されたが、いずれも少数であり、飛来世代についての侵入ピークを捕らえることは困難であった。本手法は畦から調査できる簡便な調査法であり、これまで不明であった移植直後からの飛来虫の実態を把握できる有効な手法である。



写真1 すくい取り法

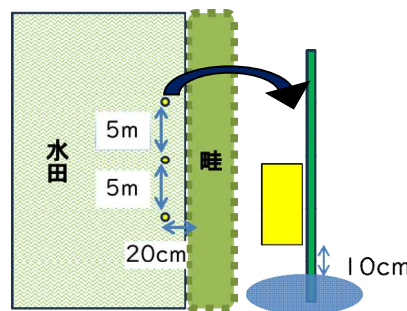


図 黄色粘着板の設置例
左: 圃場内配置例(●設置箇所)
右: 粘着板設置例



写真2 黄色粘着板に捕捉されたヒメトビウンカ (→)

今後の方針

移植後の飛来虫数と保毒虫率検定の結果を用いることにより、イネ縞葉枯病のより正確な発病予測に利用できると考えられる。

※保毒虫率検定: 毎年5~6月にコムギ圃場から採集したヒメトビウンカ幼虫のRSVの保毒を検定し、保毒虫率の年次推移を把握している。